

長大橋と地域活性化

中村俊行*



1. はじめに

橋梁技術の進展は従来不可能とされた径間での架橋を可能とし、近年の道路整備による全国交流ネットワークの拡充や、地域の振興・活性化などに大きな役割を果たしてきた。

特に長大橋の技術開発は従前では夢の構想であった本四架橋などを現実のものとしてきた。その中で、新たな耐震・耐風設計技術の開発、高強度ケーブル材等の材料技術、大ブロック一括架設や大水深大型基礎等の施工技術の果たした役割は非常に大きい。

長大橋の実現に当たっては技術開発と併せて、その経済性の検討が行われてきている。しかし、長大橋の建設は、海峡部など従来の交流が船に頼るなどで限定されていた地域で行われることが多い。そのため、走行・時間便益以外の、定量的に予測しがたい社会経済的な大きな影響を架橋周辺地域に及ぼす。このため、長大橋の架橋を契機として、地域の活性化を図る試みが各地で行われている。

今年の3月までの約3年間広島県で勤務していたが、その間に平成11年5月1日の瀬戸内しまなみ海道、12年1月18日の安芸灘大橋という2つの長大橋の開通式に立ち会う機会に恵まれた。両プロジェクトともに、その実現を県民、地域住民が長年にわたって願っていたものである。そして、完成を機会に、地域の活性化と経済の発展を図るための検討と取り組みが行われてきていた。ここに、長大橋の建設と地域活性化への取り組みの事例を、この二つのプロジェクトの場合について述べてみたい。

2. しまなみ海道の開通

地元では一般公募した「瀬戸内しまなみ海道」の愛称で親しまれている本州四国連絡橋西瀬戸自

動車道は、広島県の尾道市と愛媛県の今治市を連絡する総延長は59.4Kmの道路であり、10の橋でかつては瀬戸内海の「村上水軍」が活躍し、勇壮な海のロマンを繰り広げた歴史ある芸予海峡の9つの島々を通過している。

また、しまなみ海道には本四連絡橋の他の2ルートと異なり、橋梁に徒歩や自転車で渡ることのできる自転車歩行車道とバイク道が併設されている。島と島、本州と四国を結ぶ自転車歩行車道は、橋を渡りながら、眼下に瀬戸内海の多島美が織りなす絶景を望むことができ、観光客のサイクリングロードとしての利用が期待されている。

しまなみ海道の開通効果を十分に生かすために、広島県、愛媛県の沿線20市町村が共同して平成6年2月に、「瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会」が設立されている。協議会の目的は、周辺市町村の広域的課題に対する連絡調整および事業の推進、周辺地域の活性化のために調査、研究および施策の推進、広域共同プロジェクトの推進などである。具体的には、ガイドマップ、ガイドブックの作成、ホームページの開設、シンポジウムの開催やサイクリングシステム調査、途中下車システム調査などを実施してきている。さらに、開通のイベントとして「しまなみ99記念イベント」を企画し、開通の前後の期間で合計1000以上のイベントを実施している。

さらに、周辺地域に広がる20市町村のつながりを活かし、瀬戸内海で育まれたそれぞれの歴史や文化、風土を体験しながら学ぶために「しまなみ大学」が設立された。学長に地元生口島出身の平山郁夫・元東京芸術大学学長を迎え、交流による地域の活性化と新たな地域文化の創造を図るために、各地域の豊かな個性を学部(学科)として設定し、全国を対象に誰もが参加できる開放的な生涯学習システムである。

各市町村の役場などで、入学金300円と引き替えに学生証を受け取ると、各施設の入場料の割引

*建設省土木研究所道路部長

が受けられるとともに、「しまなみ大学通信」により大学の最新情報が受けられる。さらに、1年間で各学部の講座に10回以上参加すると、修了証書、修了認定バッジの記念品が与えられる。

従来からしまなみ海道の沿線には、尾道市の古い寺社や文学遺跡、国宝の刀剣などの武具で有名な大三島の大山祇神社、西の日光と言われている生口島の耕三寺など全国的に見て質の高い観光資源がある。また、波穏やかな瀬戸内海に緑豊かな島々が造りなす多島美はエーゲ海以上と言われており、さらに島々を結ぶ橋梁は、それぞれ景観を配慮した設計がなされており、豊かな自然景観と調和して、新しい観光資源となるものである。このようなしまなみ海道の特性を生かして、さらに観光客を誘致し地域の活性化を図るために、各市町村では官民が共同または単独でそれぞれの施設の新設や改築を行ってきた。例えば広島県の生口島にある瀬戸田町では、海岸事業としてサンセットビーチ、約600種類の柑橋類を収集・展示したシトラスパーク、平山画伯の絵画を展示した平山郁夫美術館などを整備してきた。

以上述べてきた取り組みにより、昨年の5月の開通から沿線地域の観光客が大幅に増え、経済面でも大きな効果を上げている。広島県の推計では、開通以降半年間に訪れた観光客は631万人、県内経済への波及効果は、直接、間接を含めて総額830億円、経済効果を通じた県内の雇用創出効果は4400人とされている。瀬戸田町の昨年の観光客数は295万人と前年の2.3倍、尾道市も1.65倍の334万人を記録している。

今後観光ブームを持続させるために、さらに沿線の市町村では継続的な催しを行っていくとともに、リピーターの確保のために、新しい魅力の提供について検討されている。また、広島県では、瀬戸内の十字路としての立地のポテンシャルや、優れた自然、文化を活かした新たな観光交流資源の創出と地域活性化のために、現在建設中の中国横断自動車道尾道松江線による山陰から四国に至る南北の連携軸の実現を視野に入れ、沿線地域の振興の指針となる「しまなみ海道・尾道松江線戦略プラン」の策定を行っている。

3. 安芸灘大橋の開通

安芸灘諸島連絡架橋は、広島県豊田郡川尻町と、

その南東に位置する安芸灘諸島を8つの橋で連絡し、当地域の交通体系の整備を通じて、産業の振興、医療、教育および文化などの生活環境の整備を進め、島嶼部住民の利便性の向上と定住基盤の整備を図るものである。また、この地域は、景観指定地域、瀬戸内中央リゾート構想地域に指定されており、瀬戸内海特有の豊かな多島美を生かした観光開発の促進にも力を入れている。

これまでに、8つの橋梁のうち5つが供用されており、残る橋梁のうち、本土側の川尻町と離島を結ぶ最も重要な1号橋、安芸灘大橋(全長1175m、中央径間750m、全幅12.7mのつり橋)が今年の1月に完成した。離島側では下蒲刈島(下蒲刈町)と上蒲刈島(蒲刈町)はすでに蒲刈大橋(2号橋)で結ばれており、安芸灘大橋を使うことにより、今まではフェリーに頼っていた本土側との連絡は飛躍的に便利になった。

さらに橋の開通によって、島の住民の生活は大きく変わるものと思われる。本土への通勤・通学、買い物、通院、レジャーなどの日々の暮らしの利便性が向上するとともに、特産品のミカンなどの農作物や海産物の出荷・流通に要する時間やコストが縮減されることになる。さらに、観光客数が増加し、観光施設や観光産業の振興につながり、地域の活性化が期待されている。

この安芸灘大橋を、県内でも特に人口の減少率が高く、高齢化の進んでいるこの地域の活性化の大きな柱とするために、両町ではそれぞれ観光客の誘致のための、特徴有る観光施設の整備を進めてきている。下蒲刈町では全島を公園化する「ガーデンアイランド構想」に基づいて、朝鮮通信使資料館や美術館、蒲刈町では「県民の浜」の整備や、特産品として藻塩の生産などを始めている。

1月の開通以降、計画交通量の約2倍の交通が安芸灘大橋を通過している。特に土日曜日には、広島市からの日帰りルートとして適していることから、多くの観光客が橋を渡って両町を訪れている。さらには、本土側で暮らしている家族が島を訪問することが盛んになっていると聞いている。

以上の事例に見られるように、長大橋の建設は地域の活性化に大きく寄与するものであり、そのためには地元の積極的な取り組み、地域の連携、官民の協力などが不可欠である。